

袖 銅板  
珍板  
日光名所圖會

中澤祚能編  
上

特別

ル' 3

3617

87(4)

10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7

探

勝

吳眉泥圖

捷徑

皇明  
治十五年  
春三月

# 東洋迂人海書

日光名所圖會

中澤 祚能 著

日光山總說 日光山古を二荒山といひ延喜式神名帳に  
 二荒山神社とあり下野國都賀郡に鎮座す下野國  
 上古へ毛野國といひて今の上野國に隸せり仁徳天皇  
 の御宇上毛野下毛野に分け郡の名も古に塚の郡とい  
 ひしと和同の勅宣に國郡邑里の名を嘉字を撰み二字  
 不定めよとの事より國名も毛の字を省きて上野下野  
 とし郡名も塚を轉じて都賀と改めありといふ抑當山  
 の神代よりの靈蹟ありしに神護慶雲年間勝道上人跋

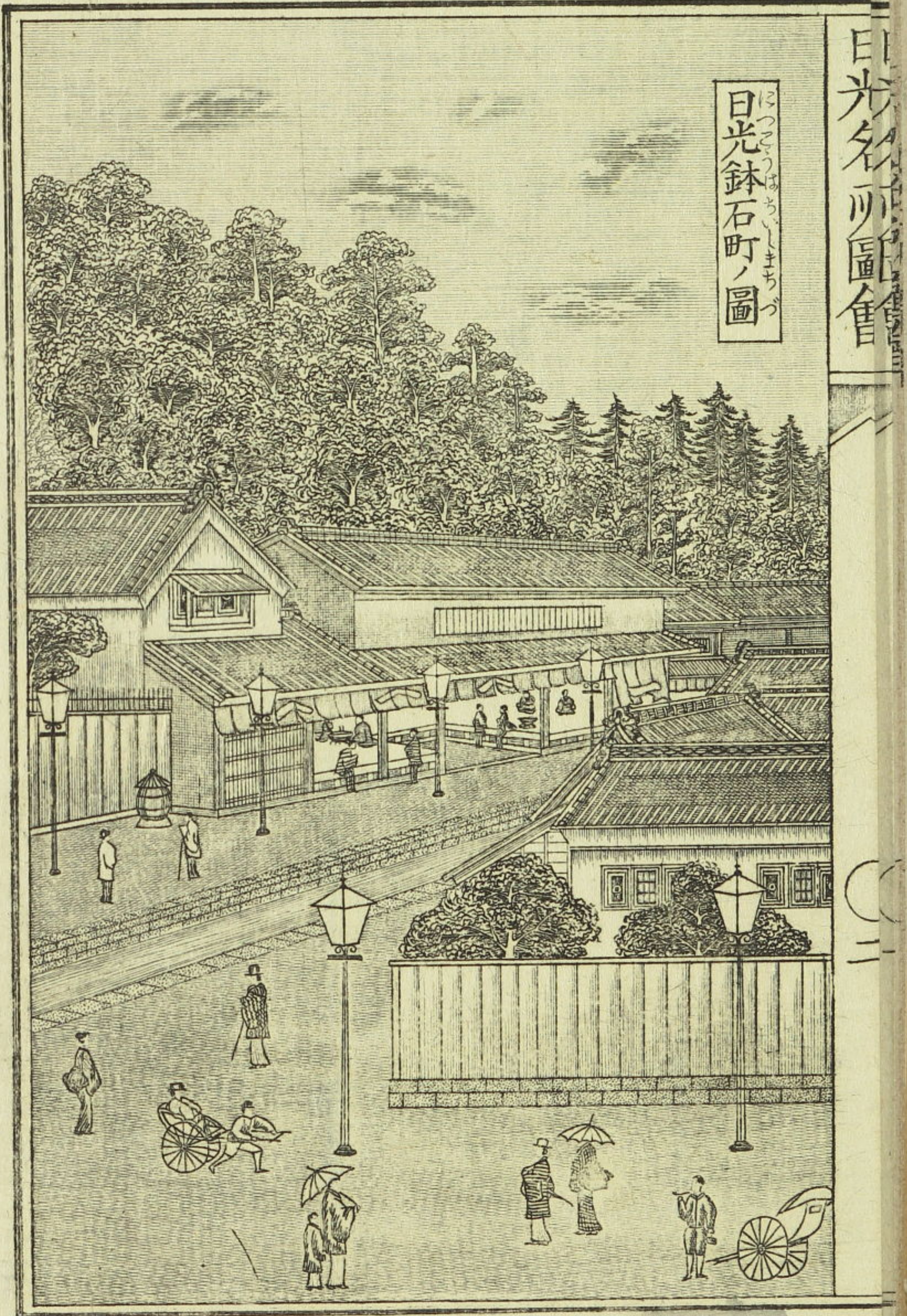
日光名所圖會

一

渉と企て、より神佛混淆、其後弘仁十一年空海和尚  
登山せり、れし時、山と日光と書けり、夫れを幾多の  
星霜を累ね漸次、社堂僧坊を建設し、元和三年三月十  
五日徳川祖宗の靈柩とて、遷してより、今の莊觀と  
極めたり、徳川幕府の時、日光領一萬三千石あり、東  
ノ宇都宮街道大澤驛まで四里、壬生街道ハ文挾まで五  
里、西ハ足尾まで六里、久我村までハ七里、西北ハ栗山郷  
まで七里、中宮祠の奥ハ上野の境まで九里、余北ハ會津  
領の境まで八里許、悉く當山の領地あり、其上社  
殿の修復堂塔の營繕等、悉皆幕府の爲に所ある、故華麗

壯觀善と盡し、美と盡し、俗に日光を視ざれば結構と言  
え、ざれの語、巧く不至きり、蓋し格言といふ處、然るに  
明治維新の秋より、茲に十數年日、頽廢し、赴き此美觀  
の竟に蕩盡せん、と憂ひ有志者集りて、保晃社とい  
ふを設け、千百年の後までも保存せしむ方法と立ちり  
衆人皆悦び、此法をして永世に行あられ、あは帝、當山  
の幸のみあは、實に我國の榮といふ處、  
日光鉢石 岩戸町石屋町稻荷町御幸町鉢石町等、長さ十  
三四丁あり、○驛の中程に鎮守の社あり、○東側ハ瑞雲  
山龍藏寺とて、寺あり、寺内ハ三十三所の觀音を安置

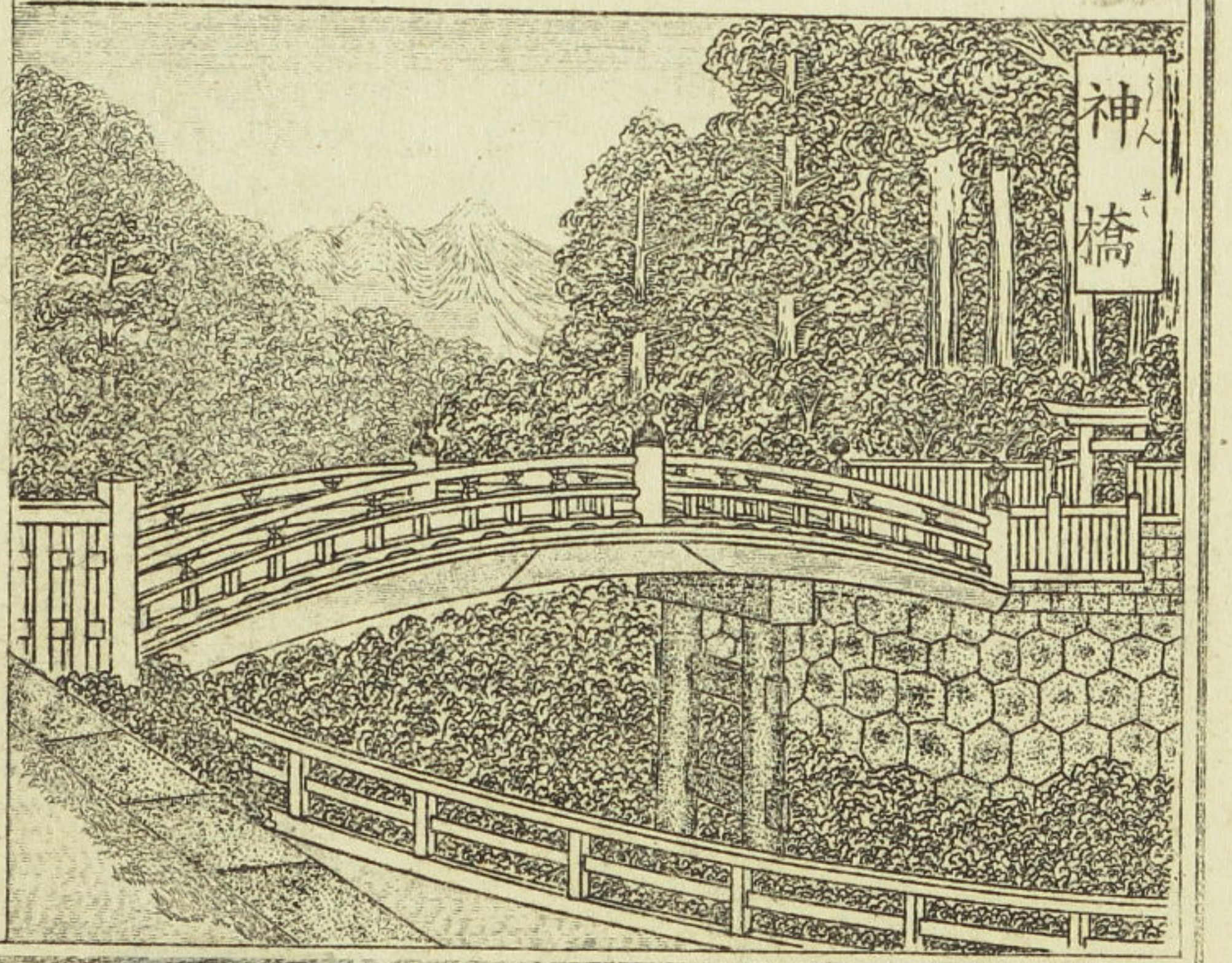
日光鉢石町ノ圖



す又鉢石山観音あり○鉢  
 石町に當所の名産椀折敷  
 塗物等と高き店あり此  
 町と出まば直に日光山の  
 入口乃ち神橋あり神橋よ  
 り諸方への道法の巻末に  
 記す

神橋 長さ十四間幅三間四  
 尺總朱塗ふいて欄干擬寶  
 珠あり常人の渡るを許さば

神橋



此川ハ華嚴の龍の下流よりて則ち大谷川あり往古勝道上人登山の時此處兩岸絶壁よりて如何とも為難きと神助ニ依て渡ると得たり依て神橋の名ありといふ古ハ山管の蛇橋といひしと云

法の水みあけと深く尋ねむくけとも志し山管の橋

假橋 神橋より二十間程東より長十三間幅三間人馬

共ニ往来ハ

大谷川 中禪寺湖より出て華嚴滝とあり大澤幽谷を經て流る故大谷川の名あり東流七八里よりて絹川ニ

入る此川より海苔採れり

松平正綱並杉寄進の石牌

仮橋と渡り本宮社の下路

傍より正綱ハ松平伊豆

守信綱の父あり碑銘畧す

○御供水同所の右より

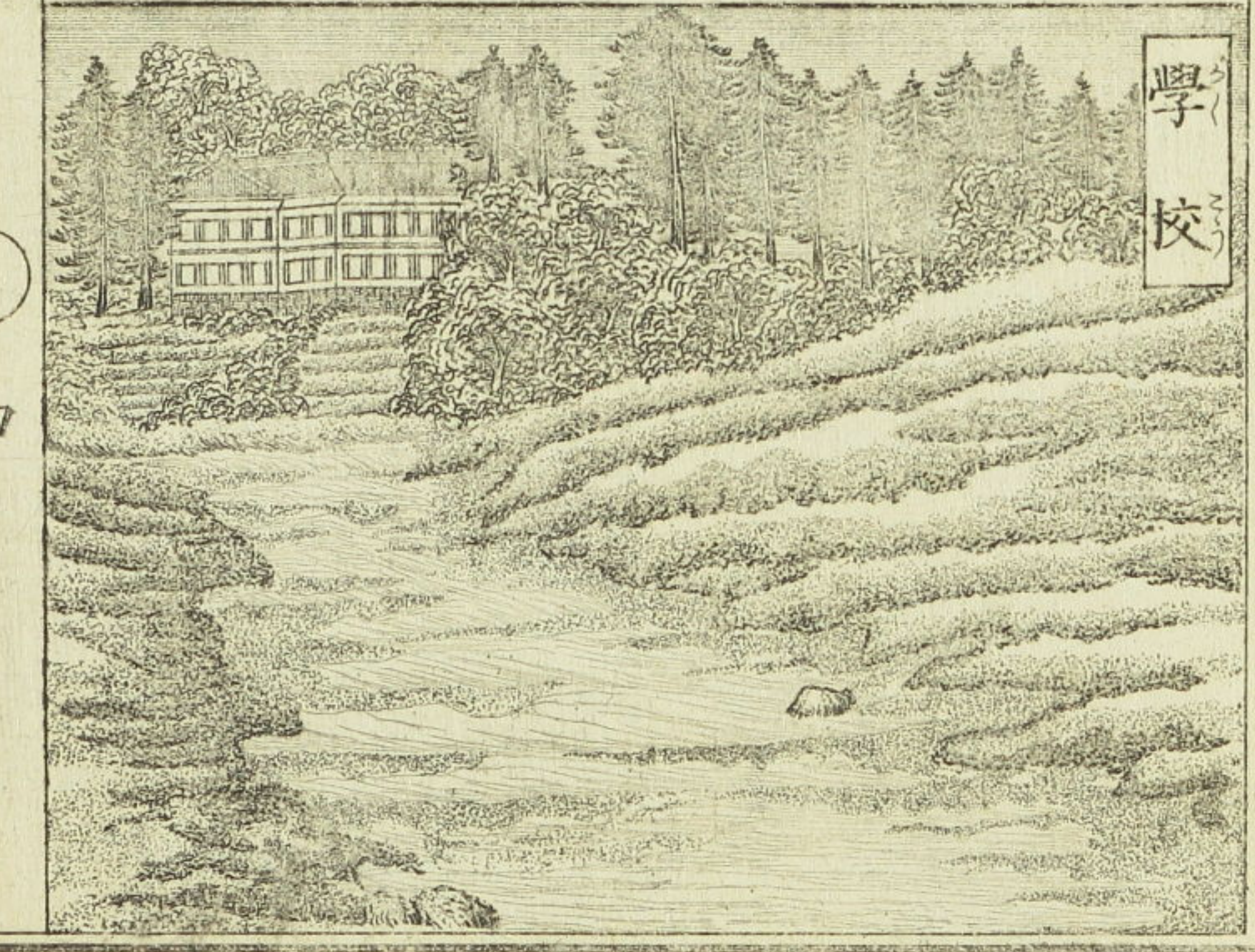
水色透明甚冷あり

學校 同所右の方より當

地の公立小學校あり

本宮社 仮橋の向ふあり丘

學校



の上ニ鎮座す前々大谷川ニ對シ東北ニ稻荷川ニ接す  
日光三社の一あり祭神味耜高彥根神あり本社拜殿と  
も銅葺總赤塗あり

三層塔 本宮の後ニあり鎌倉實朝創建す所ニして今  
も貞享年中再興のものあり

長阪 神橋の向ふを左の方へ登り中山通りとつゝ○右  
側ニ土院の境内ニ安達藤九郎盛長の石塔あり

満願寺 長坂の右側ニあり境内ニ兩大師と安置す又保  
晃社事務所あり同社ハ日光山保存の爲め設くる所ニ  
して大小有志と募り醵金して以て其方法を立ふる者

あり○中禪寺の走り大黒

今ハ此寺内ニ安置す

三佛堂 同境内ニあり旧寺

ハ新宮の傍ニあり者ニ

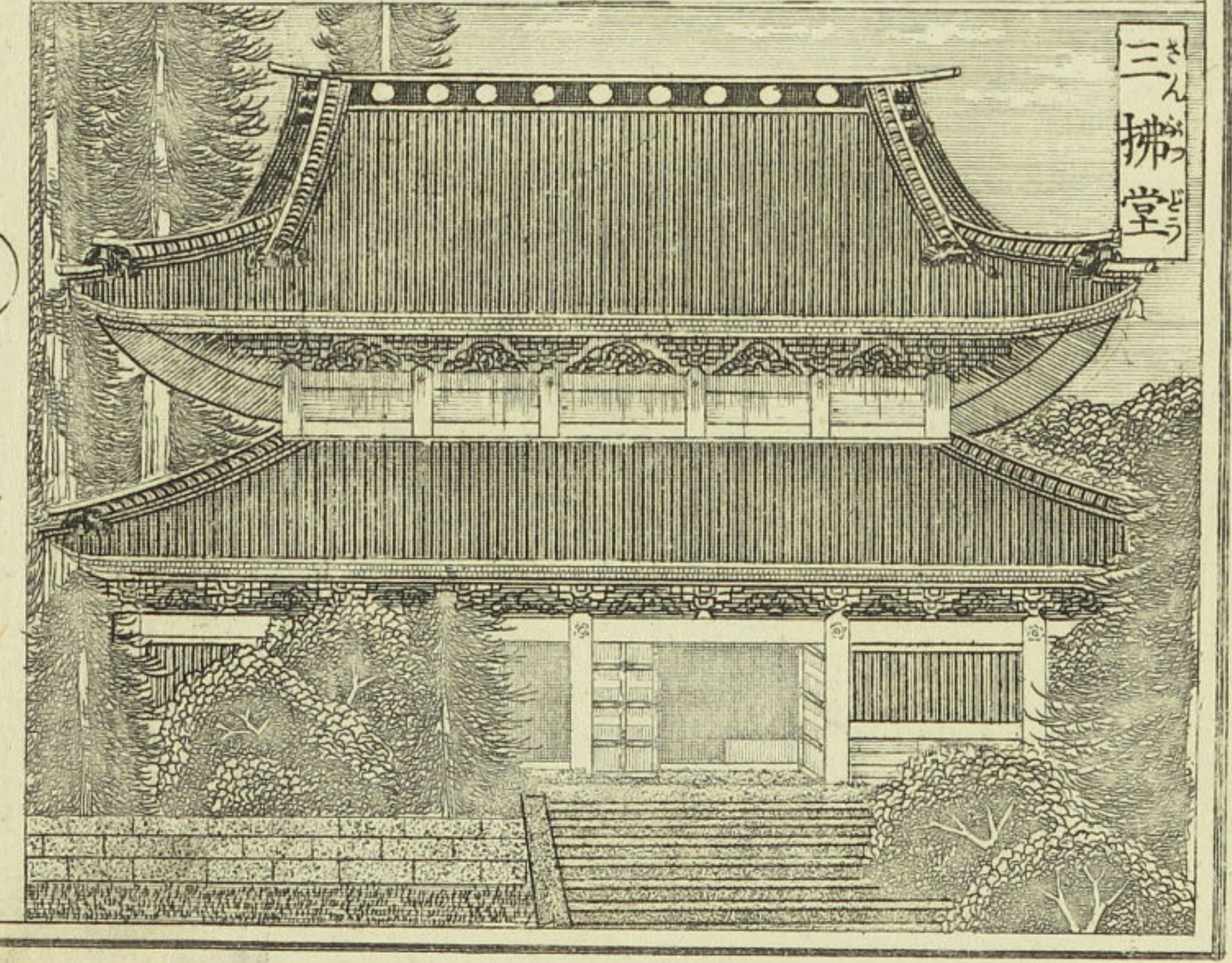
して最も古き堂宇あり往古

金堂と稱せし是あり正面

十八間横十五間銅葺赤塗

阿彌陀千手觀音馬頭觀音

と安置す又此堂内ニ勝道  
上人の木像あり

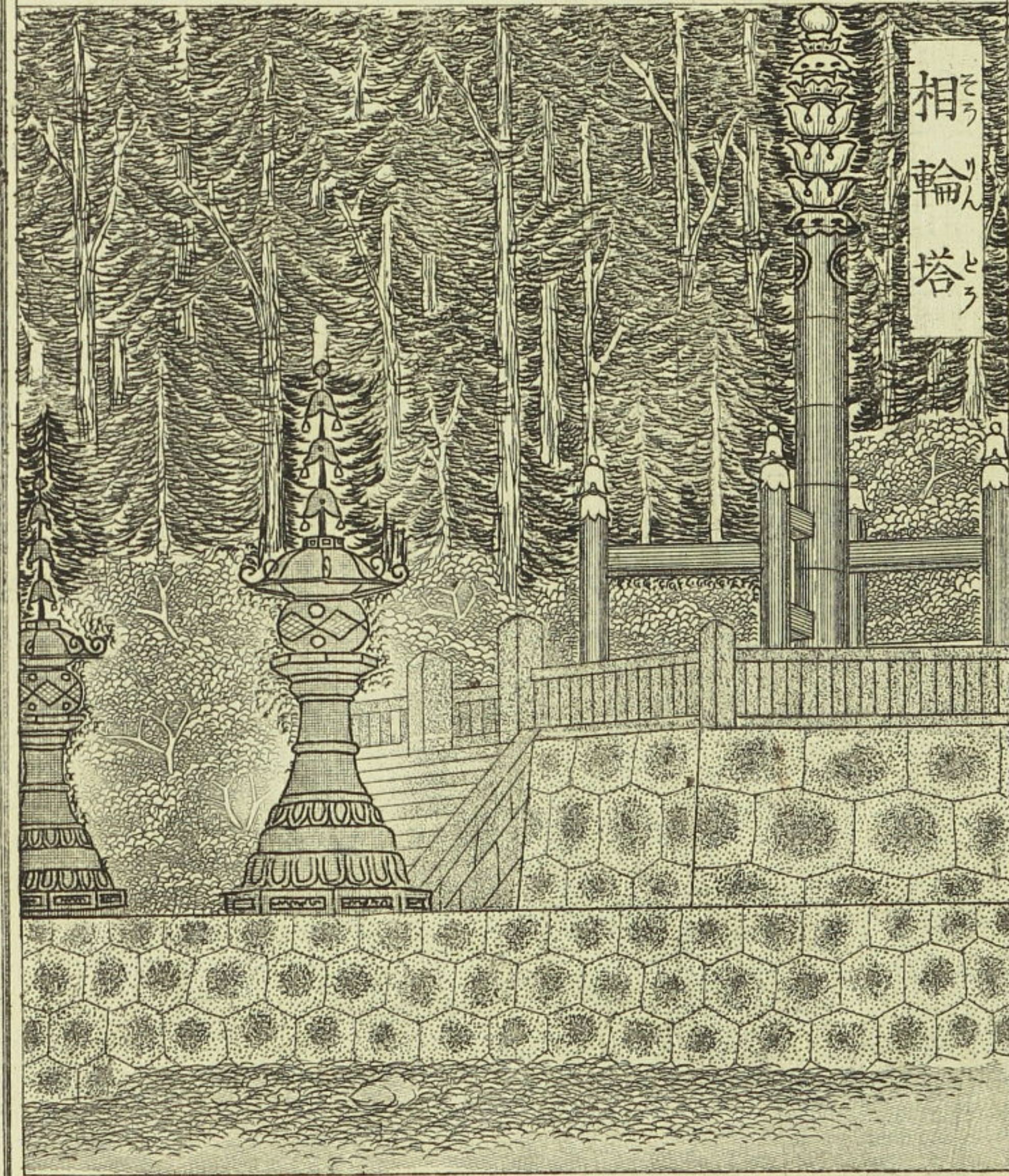




相輪檜 同境

内ふあり是  
も旧時ハ新  
宮の傍ふあ  
りハを維新  
の後三佛堂  
と共ふ此處  
ふ遷せり天  
海僧正の建  
了所總高地

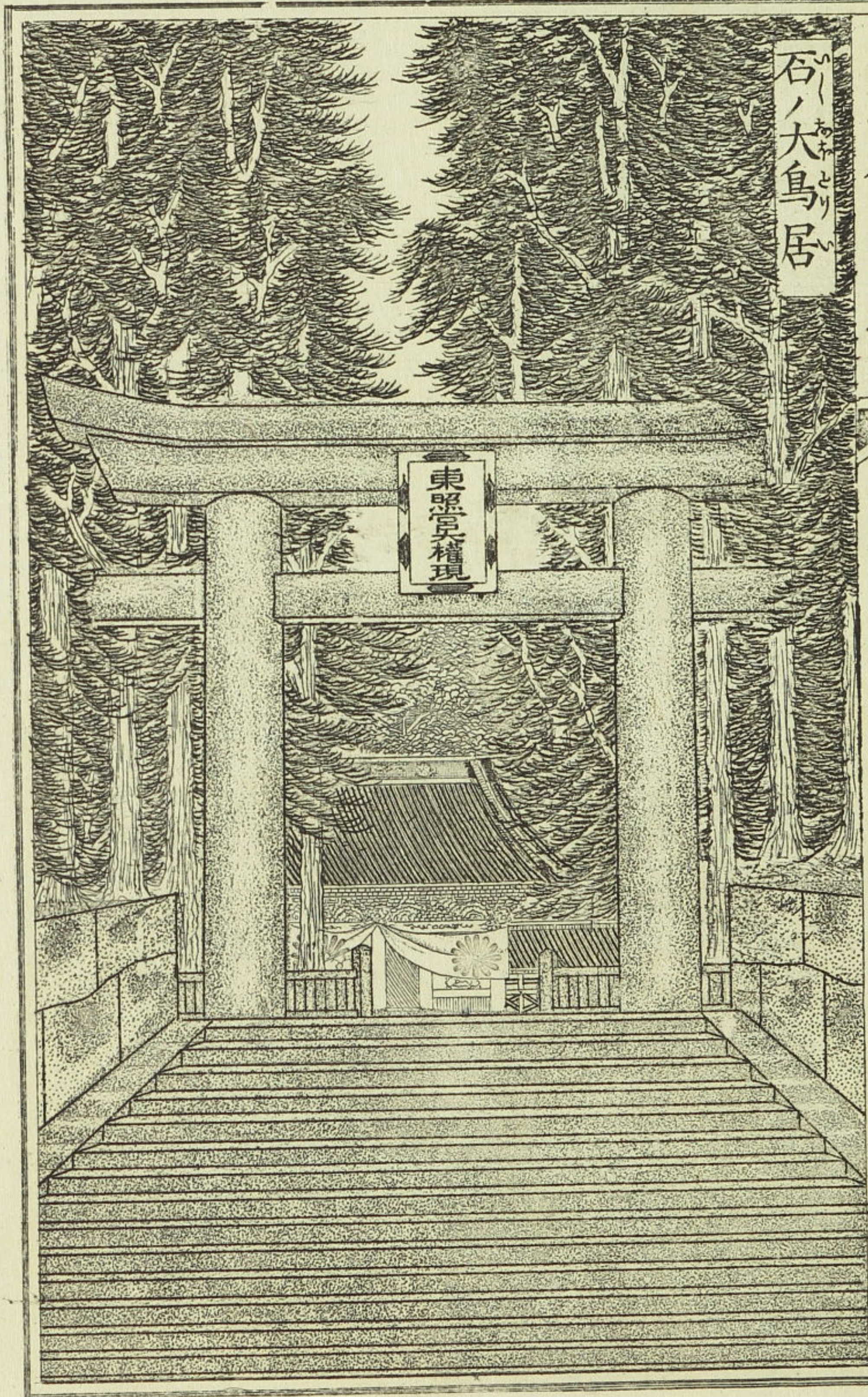
相輪塔



磐石より七間二尺元口直徑三尺一寸基石の大さ八尺  
四方八角坐石も二丈一尺七寸廻り控桂の高さ一丈七  
尺八寸元口直徑一尺八寸五分金瓔珞の如き物二十四  
連金鈴二十四個あり減金如き物下ふ葵の紋と金ふて  
置けり

石大鳥居 湍願寺の前を通り石雁木を登り處に立て  
て總高二丈七尺六寸五分柱石の直徑三尺五寸地輪石  
八尺四方あり元和四年四月黒田筑前守長政の獻す  
處あり○鳥居前二三間を隔て左右ハ高五尺幅二間  
長四間許石を畳み上げたる上杉の古木並び生ぜり

石大鳥居



五重塔 石鳥居と仁王門との間西の方より塔内三間

四方高十七間二尺柱も金襴卷承塵の上も十二支の彫物あり二重垂木銅管ふして何れも極彩色廻り八間四方程ある銚石の玉垣と構へたり慶安三年若狭侍従酒井忠勝の寄進する所あり

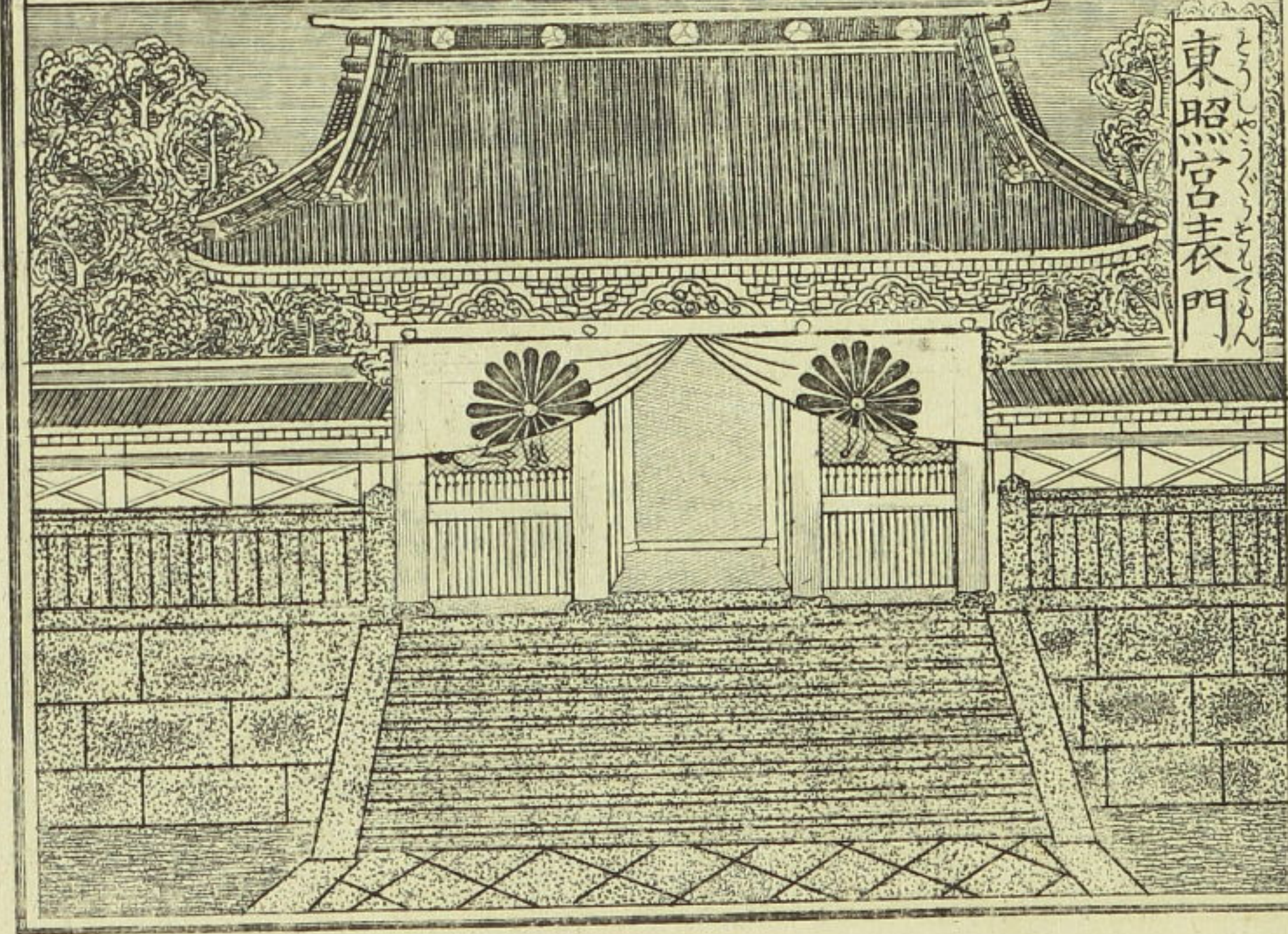
石大燈籠 鳥居の下と仁王門の下と二基宛り同候の貢むる所あり

滑海藻石阿房丸石 仁王門の下石垣の中も畳み込た

巨石あり共三間四方許を謂定りあり

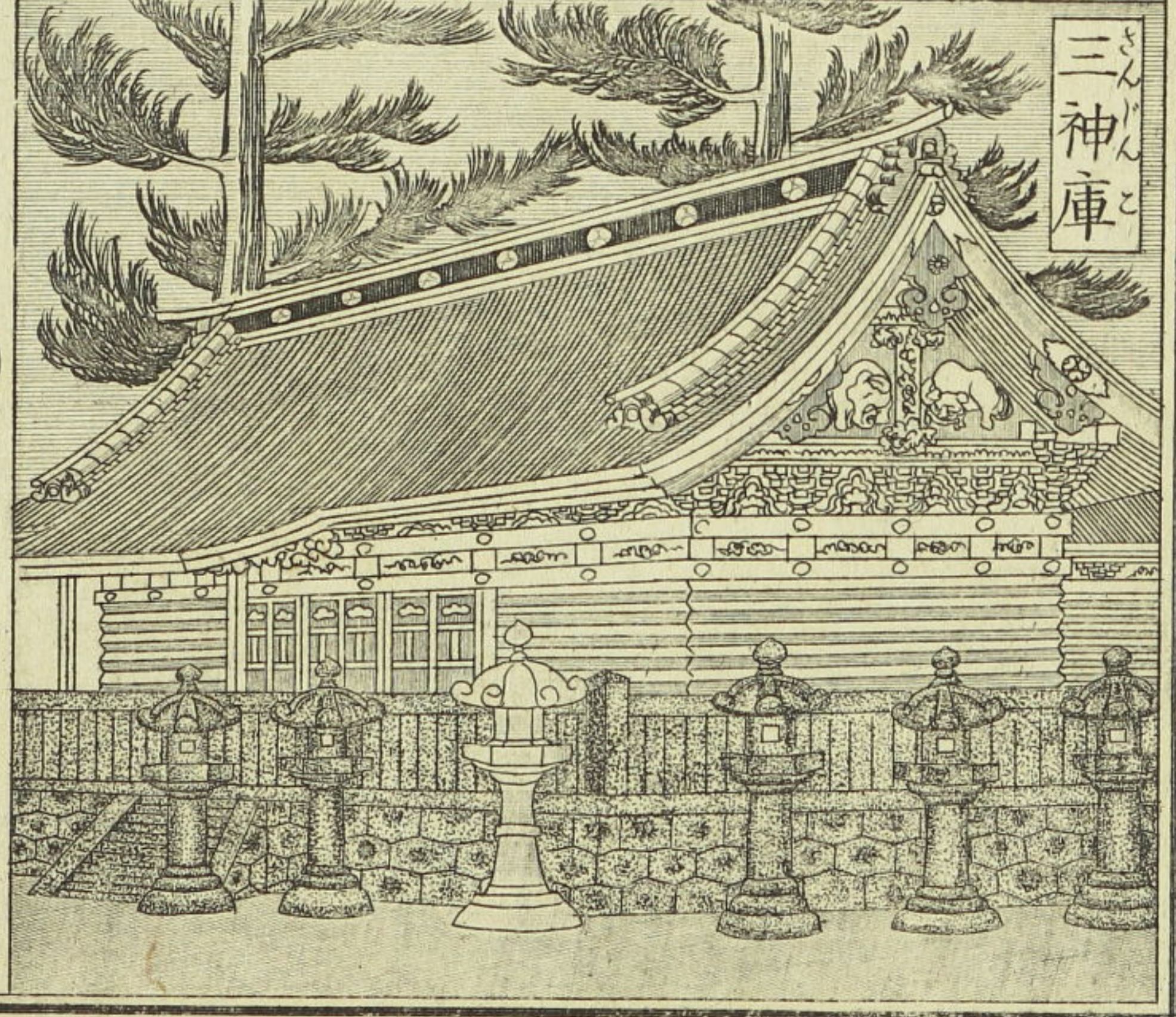
仁王門 旧時を左右一丈餘の仁王今三代公のと安

置したり金色の狛犬二頭時旧  
 仁王の後ろと置く正面四間  
 小ありし者  
 二間半朱塗銅葺金襴卷の  
 丸柱岳木黒塗表裏左右の間  
 だ格天井ふして菊の筆彫と  
 金龍小雲形の彫物あり此處  
 より左右一銅葺赤塗の屏垣  
 と折廻し東へ裏門西へ新宮  
 鳥居の手前一至了此門内よ  
 り陽明門ふ至了迄數百歩の



東照宮表門

間幅一丈程を角あり石  
 みく敷つめ其左右丸  
 小石を敷つらぬたり○  
 門外の左右大樹の老  
 杉數十根あり往古より  
 の杉ありと云ふ  
 三神庫 仁王門と入ると  
 右の方小相並ぶ一二神  
 禮の諸道具三ハ共一銅  
 具足等を藏ひ  
 菅總朱塗ありかち物総



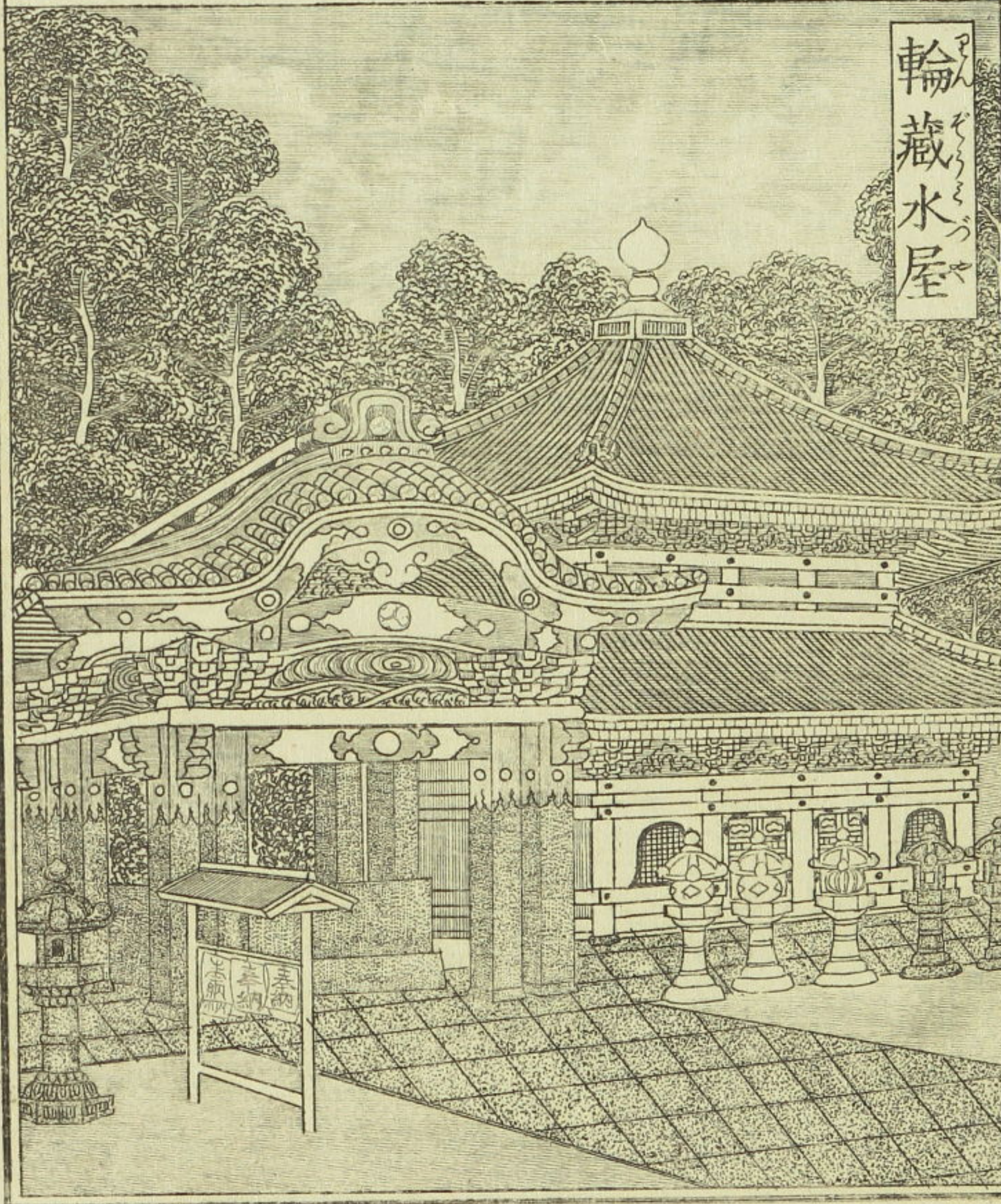
三神庫

日光名所圖會

減金めつきふして彫物びんぼと花鳥草木くわうちゆうさうもくの極彩色柱ごくさいしきしらハ金襴卷共きんらんまきども一  
 椽側階えんがわきざせと設まく一の神庫外長押しんこちゆうちんおしの破風下やぶかぜした一鼠色ねづいろの白色しろいろ  
 大象たいざうと圖ずせり狩野探幽うのうさんゆうの下繪したゑありとつみ  
 厩うまや 門内左もんないひだりの方かたふりり三間さんまふ五間半ごまはんの素木造りすぎづく銅管金  
 減金めつきの總そうか物長押ものちんおし上うへ其他か所々ところどころ極彩色ごくさいしきの彫物びんぼ猿さるふ花  
 實じつの模様もようあり祭禮さいらいの時ときのこ此厩このうまやふ馬うまと撃つぐ  
 神木しんがくの楨まさき 厩うまやの側わきふりり周廻まわり一丈餘いちじゆうご枝葉えい垂たりて茂生もしやうせ  
 り當所とうじよふて是これと金松樹きんまつじゆと稱なづひ  
 番所ばんじよ 厩うまやふ並ならぶ銅管總赤塗どうくわんそうせきぬ俗しやくふ赤番所せきばんじよとつみ  
 手洗水盤てあらいみずいばん 番所ばんじよの西にしふりり俗しやくふ御手水屋おてみづやと唱となふ水盤みづいばんハ

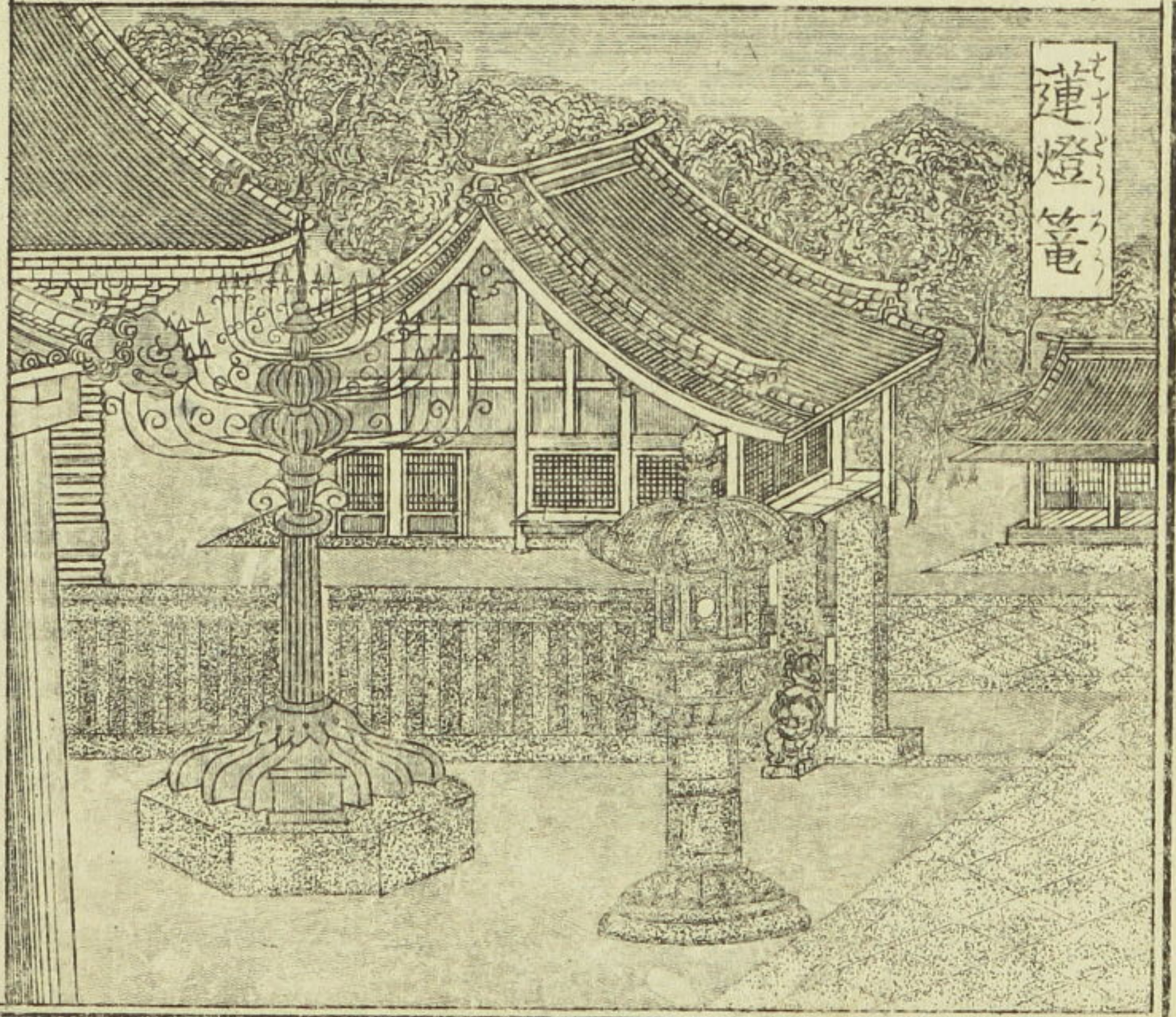
八尺五寸はちしちごせんふ四尺高よんしちたかさ三尺五寸さんしちごせん御影石おんかげいしみく造りつくり盤ばん  
 底そこより常じょうふ水みづが湧わき出いでるやふ設まけ水屋みづやと  
 二間にまふ三間半さんまはん柱はしらと七寸角程しちせんかくほどの御影石おんかげいしみく一隅ひとすみふ  
 三本さんぼん宛つ都とて十二本の石柱じふにぼんのかしらと立てたて悉ことごとく雲唐艸うんたうそう  
 の彫物かりものあり減金めつきのわ物ものと打うち天井てんじやうと飛龍ひりゆう  
 の極彩色ごくさいしき元和四年四月げんわにんねんしがつしがつ鍋島肥前なべしまひぜん候ごうの獻けんずる所ところ  
 あり叅詣さんぎの男女おんな此處このところみく手洗てあらいひ口漱くちすすく  
 唐銅鳥居からどうとりい 水屋みづやの前まへふ建たてり笠木口金かさきぐちみく葵あひひの紋もんと置おけり  
 輪藏りんざう 水屋みづやの北きたふりり五間半ごまはん四面しめんふりて銅管二重屋根どうくわんにじゆうやね

旧時ハ一切  
 經と蔵す前  
 小傳大士普  
 成普建の三  
 像と置く俗  
 小笑ひ堂と  
 つゝ  
 諸侯獻備の燈  
 籠 旧諸侯  
 り寄附す



輪藏水屋

處左右ふ並び立る總數  
 百十八基内唐銅十五、銭  
二、石百〇一、悉  
く年号姓名  
と鑄り  
 異國貢獻の燈臺并小鐘  
 同所の石階と登りて右  
 の方小琉球より上りし  
 三十六缸の金の燈臺俗  
 小蓮燈籠と併あがりて  
 朝鮮より獻上の釣鐘何  
 り最も異様あがりて俗小



蓮燈籠

虫喰鐘むしくひかねとつゝ同左の方おなへ同國貢進こくくわんしんの廻まわり燈籠とうろう并ならび阿蘭陀あらんたより奉たまり金燈臺かねとうだいあり共ともに銘文めいぶんあり

鐘樓かねろう 朝鮮鐘ちょうせんかねの東ひがしより高たか凡たゞ二丈五六尺にじょうごろくしち廣ひろさ土臺どたい際きりへ

鼓樓ころう 同西おなへへ並ならび造工つくろひ鐘樓かねろうと同おなへ

本地堂ほんぢどう 鼓樓ころうの西おなへより向拜むかひ造り十二間四面じふにまへんの銅管虹どうくわんこう

梁りやうの上うへへ虎この彫物おりのものあり柱はしらと金欄かねらん巻黒塗まきくろぬりの二重ふたへ岳木たけぎ極ごく

彩色さいしきの彫物おりのもの金銀きんぎんと鏤ちりぞめあり内陣うちじん天井てんじやうへ長八間ちやうはちまの墨画すみゑ

の蟠龍ばんりゆう狩野かのの安信あゆみのの筆ふであり旧時むかしへ日月にちげつ二光にこう十二じふに神將しんじやう觀かん音等おんどうと安置あんぢせり

陽明門やうめいもん 俗よこに日暮ひぐり門かどといふ

同所おなへ正面しょうめんより南西みなみにし向むかひより

て四間よつまより二間半にまゝはん三手先さんてせん造り

四方よつたは唐破風たうはふう銅管どうくわん二重ふたへ岳木たけぎの

下したに金竜きんりゆうと白竜はくりゆうと組出くみだし其

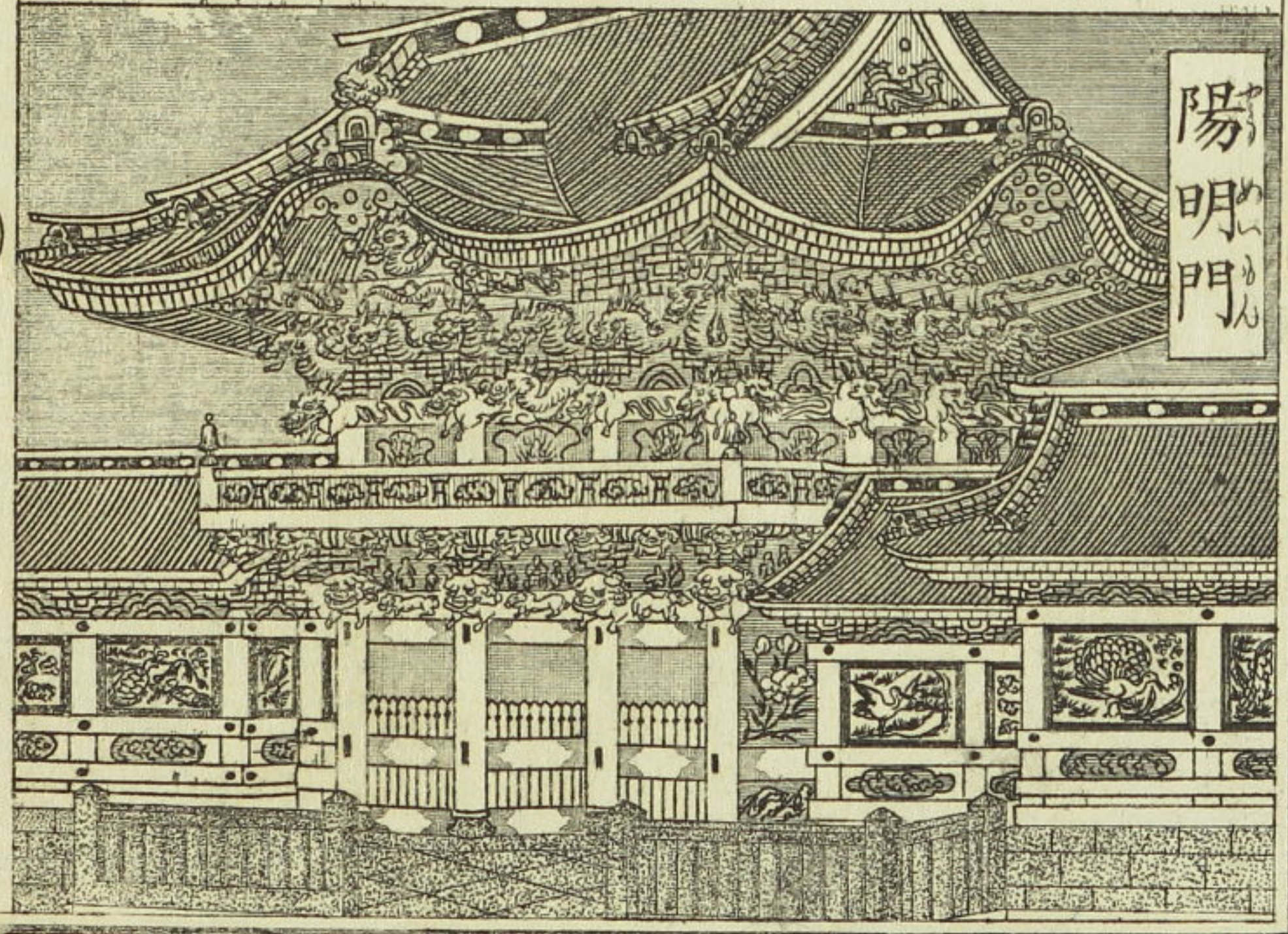
間ま毎ごとに素木彫すきおりの獅子しし數頭かずかぶあり

り桁けがと皆みな牡丹唐草ぼたんたうそうの彫物おりのもの柱はしら

十二じふに本地ほんぢ紋綾菱もんあやひしの内うちへ圓窓まきまど

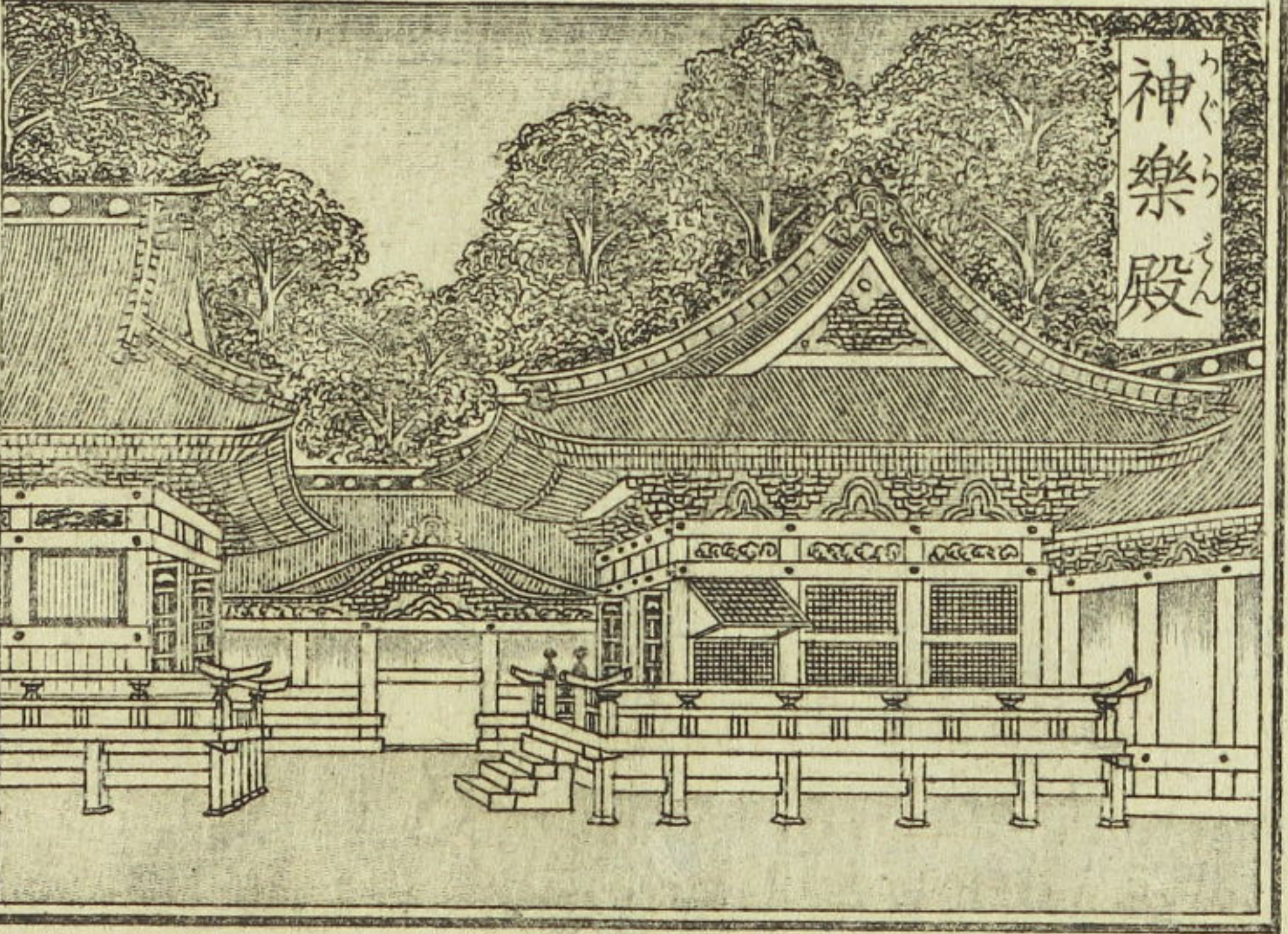
を置おき其内そのうちに鳥獸草花とりけものくさなの彫

あり高欄たかくらんの間まへ唐子遊たうこあそびの



丸彫あげ軒通り三尺毎一金龍の彫一本宛あり冠木上  
 通り人物鳥獸等の彫物或ハ琴碁書画人物ハ周公  
 孔子顔回盧敖費張房琴高瞿康阮籍豐干王子猷其他虎  
 溪の三笑四友九哲等何れも極彩色一して間々ハ滅金  
 の金物を透間なく粧ひ目もあやハ光り耀けり表の左  
 右ハ隨身何れ極彩色一して宛も生る如く裏の方ハ  
 金色の獅子を置く又天井昇降の龍ハ墨画一して探  
 幽法印の筆あり俗ハ八方晚の龍と云ハ又四の間天井  
 一天人を画けり同筆あり左右の廻廊折廻して百間余  
 何れ何れも花鳥の彫物其美盡し難く縦ひ終日之を視

るも視盡す能ハ次日暮門の  
 俗言誣りに非ざりあり  
 銅庫 廻廊外東の方ハ何れ總  
 銅少く裏みたる庫あり神寶  
 を納むと云ハ○同所續きハ  
 唐戸口あり御供所と云ハ  
 神樂堂 門内右の方ハあり銅  
 菅黒塗階段あり並びて護摩  
 堂旧時ハ此處より正五九月  
 十一日より十七日まで天下



神樂殿

泰平の護摩供ありとあり

神輿舎 同所左の方より銅葺黒塗唐戸あり祭禮の時

神輿三座此處へ出御ありとあり

唐門 同所正面あり四方棟唐破風唐木造り正面破風

上の屋棟小唐銅より造り虎小似多る者有り俗呼を

恙と云る虫ありと唱ふ長さ四尺許鎖めて繋ぎたり又

東西の棟上小龍二頭是も唐銅より造り長さ四尺余も

ありべし門正面の兩柱ハ昇降の二龍ハ梅竹を添彫り

虹梁ハ龍の高彫正面ハ虎の丸彫有り柱ハ丸龍丸獅

子の彫物正面冠木ハ孔子十哲の彫物向ハ破風ハ鳳凰

欄間より巢父許由或は七福神七賢人の彫天井ハ素木

地ハ天人を彫り兩扉ハ菜牡丹梅等の高彫いづれも減

金或は赤銅のかお物を粧ひ彫鏤の丁寧その細密巧緻

いづれありあり○左右の玉垣ハ本社拜殿の外を折廻

銅葺より千草萬木百花百鳥の彫鏤宛も真の如し

拜殿 門内の正面あり凡拾二間ハ五間許正面階段五級

一面ハ減金のかお物を張詰め濱椽高欄共ハ黒蠟色柱ハ

總金外長押ハ素木鳳凰の高彫金彩色唐戸ハ金の唐草

蔭繪本間ハ二重の格天井其内ハ丸龍を画きたり内の

承塵ハ三十六歌仙を掛けたり歌ハ後水尾天皇の御震



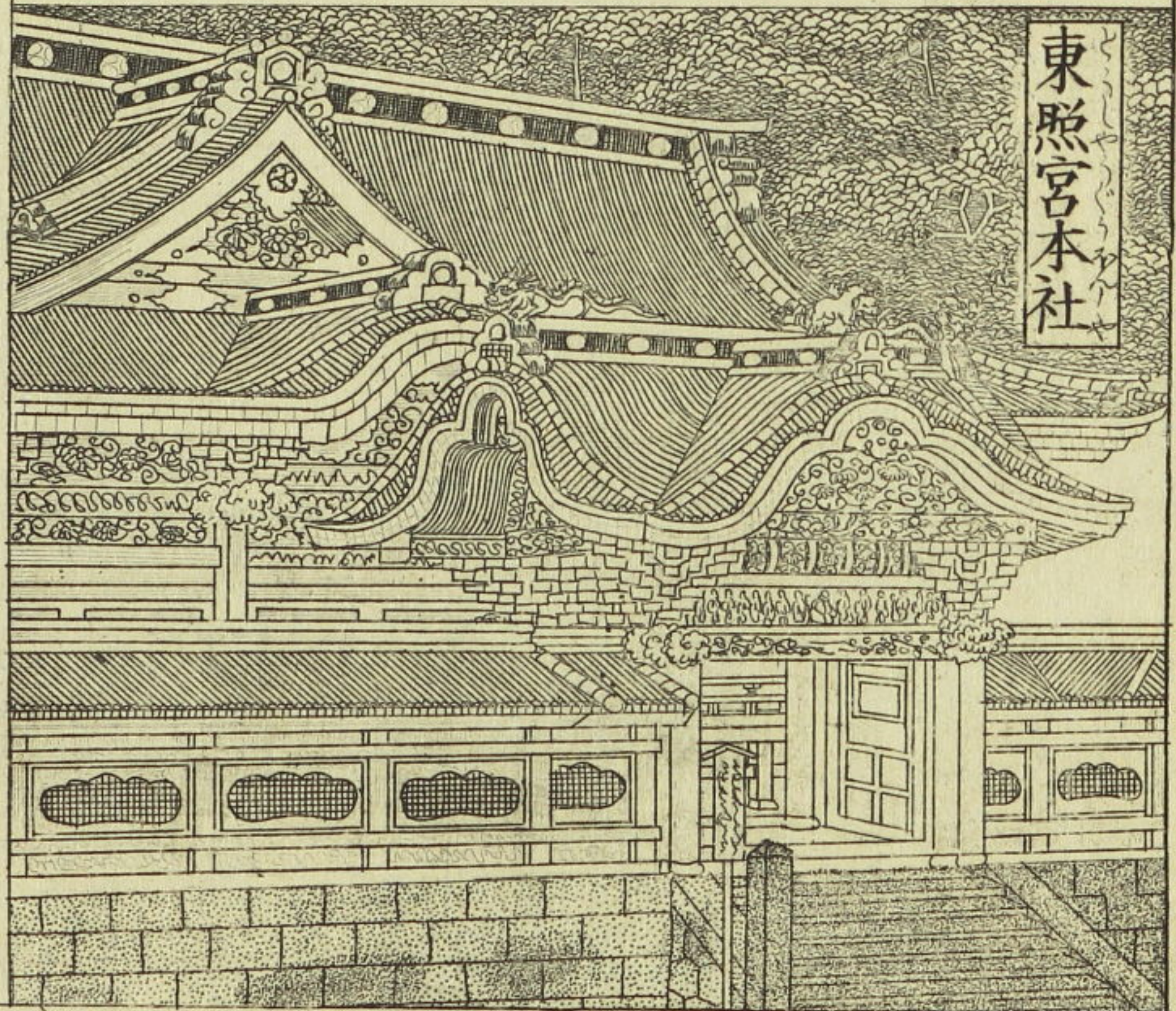
翰繪の土佐左近將監の筆東西の襖金泥地にして麒麟  
 獅子等を画く探幽の筆あり東西に着坐の間あり東を  
 聴聞所と唱へ天井天蓋折揚造り羽目も桐に鳳凰を  
 紫檀黒檀等の寄木細工目を警め久是も旧時將軍の御  
 坐の間と稱す又西も旧御門主の休息所と唱へ天井も  
 天人の彫物羽目も驚ふ松柏是も唐木寄せの彫工あり  
 拜殿と石の間の取合せの處に堆朱の卷柱と稱する者  
 四本あり  
 石の間 拜殿と本社の間を以て紅縁の畳を敷く畳下は  
 二重の敷石一枚の巨石ありと云ふ俗にお亀も石と

三万四千六百

東照宮本社

銅葺にして棟上葵の金  
 紋棟木も風木勝男木と  
 附け破風も鳳凰の彫物  
 其他社内の結構も善と  
 盡く美を盡く華舌の耐  
 了所不何りざるあり  
 柳東照公も父の贈大納  
 言源廣忠卿といひ天文

東照宮本社



十一年十二月廿六日三州岡崎ニ誕生ノ終世ノ善政美  
 事國家ニ大勲勞あり事擧て放一難く遂ニ從一位右大  
 臣征夷大將軍ニ任ト元和二年四月十七日駿府ニ薨む  
 壽七十三尊骸を駿州久能山ニ葬もり天海僧正一遺命  
 あらみより翌元和三年三月十五日靈槨を當山ニ遷せ  
 り是より先き同年二月廿一日正一位太政大臣を贈ら  
 る勅して東照大権現といふ其後正保二年十一月三日  
 宮跡を勅贈せしむる維新の後別格官幣社ニ列せしむる  
 又旧時を毎歳四月と九月十七日ニ神事ありて四月十  
 六日例幣使を下さる今ハ六月一日を以て大祭といふ

